慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	makeの複雑他動詞構文における節目的語外置と形式的itの有無について
Sub Title	
Author	木村, 快(Kimura, Kai)
Publisher	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人
Publication year	2023
Jtitle	Colloquia (コロキア). No.44 (2023.) ,p.137- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語学・言語学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20231220-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

make の複雑他動詞構文における節目的語外置と形式的 it の有無について*

木村　快

1.　はじめに

英語で「ある事柄 X を明らかにする」と言いたいとき，make X clear という表現がその候補の 1 つとなるだろう．make X clear のような [動詞＋目的語＋目的語補語] の構文では，目的語に節の形式（例えば that-節，wh-節，to 不定詞節など）をとるとき，目的語位置に形式的 it を置き，節目的語は外置しなければいけない（Huddleston & Pullum, 2002, p. 963）．つまり，make X clear であれば make it clear that ...ということになる．非英語母語話者である筆者にとってこのような“ルール”は非常に厄介であり，それゆえに強く印象に残っている．しかし，普段英語に触れていると it が現れない make clear that ...という形を頻繁に目にする．確認してみると，どうやら make X clear に限っては it を随意的にとることは慣習的なようである（Huddleston & Pullum, 2002, p. 290）．

本稿は，[make＋目的語＋目的語補語] 構文における節目的語外置の際に目的語位置に現れる形式的 it の有無についてコーパス調査を行い，make X clear 以外の表現でも（慣習的ではないにしろ）it を伴わずに節目的語外置が実際に起こっている実態を明らかにする．さらに，どのような表現が，なぜ it を伴わない節目的語外置を許しやすいのかについての分析を通して，ある構文 C_1 を内部構造にもつ語の並び [X Y] の頻度が，別の構文 C_2 における偶然にも同じ [X Y] という語の並びの頻度に影響を与える可能性を考察する．

例えば，make it explicit that ...「...ということを明らかにする」には [動詞＋it＋目的語補語＋that 節] という形式を設定できる．また，make explicit X「X を明らかにする」（make X explicit の X と explicit が倒置した形）には [動詞＋目的語補語＋目的語] という形式を設定できる．つまり，節目的語外置の際に形式的 it が現れないときには make explicit that ... [動詞＋目的語補語＋that 節] という形式となるわけが，このとき make explicit X と make explicit that ...とで [make explicit] という語の並びが偶然にも一致する．どちらも [動詞＋目的語補語] という点は共通しているものの，先に述べたように，それぞれの構文の形式は異なる．本稿が考察するのは，このような構文自体は異なるものの，同じ見た目の形式をとる構文同士はその見た目の同一性によって関わり合っている可能性である．

本稿が分析の対象とするのは，英語の [動詞＋目的語＋目的語補語] という構文，すなわち複雑他動詞構文である．続く 2 節で複雑他動詞構文とその制約について概説する．そして，3 節では言語使用の頻度を重視する立場について簡単に紹介する．4 節でコーパス調査の方法論を示し，5 節でその結果を提示する．その結果を踏まえ，6 節で考察を行う．最後に今後の課題を述べる．

ところで，本稿における「構文」とは，伝統的な「ある特定の文形式」「結果的に産出される形式的なパターン」「文法規則を適用した結果として生じる単なる副産物的構造」

* 本稿の研究と執筆にあたり，日頃から適切な指導と温かいサポートをしてくださる井上逸兵教授（慶應義塾大学文学部）と小原京子教授（慶應義塾大学理工学部），そして大学院の井上研究会のメンバーと参加者の皆様に心より感謝を申し上げます．

（坪井・早瀬, 2020, p. 122）としての構文ではなく，構文文法理論における構文，つまり形式と意味のペアのことを想定していることに注意されたい（Goldberg, 2019）.

2. 複雑他動詞構文，形式的 it と節目的語外置

英語の構文[1]の 1 つに，[動詞＋目的語＋目的語補語] がある．(1a, b)はそれぞれ動詞に make, find をとっている事例である.

(1) (a) You've made your position clear.
(b) Did you find this story interesting?

(Both from COCA)

この英語の表現を複雑他動詞構文と呼ぶことにする（Huddleston & Pullum, 2002: Ch. 4）. 本稿では動詞 make をとる複雑他動詞構文に対象を絞る（4 節を参照）:

動詞 make をとる複雑他動詞構文
形式：[make＋目的語 O＋目的語補語 C]
意味：「O を C（であるよう）にする」

一般に，複雑他動詞構文では，目的語が節の形式の場合には目的語の位置に it を置き節目的語は外置する形式を典型的にとる．つまり，[動詞＋it＋目的語補語＋節目的語] という形式になる(2)．この現象は，Huddleston and Pullum (2002)の以下の引用や，佐藤（2020：第 7 章）における「義務的」という用語の使い方からも伺えるように，一種の「制約」「規範」となっている.

If the predicand is a content clause we normally need *it* as a dummy object, with the content clause in extraposed object position, as here.

(Huddleston & Pullum, 2002, p. 963)

(2) (a) Vicki Adams' testimony makes it likely that Jack Ruby was there, but he could still have been either of these candidates.
(b) I find it interesting that people who work holidays are so unhappy.

(Both from COCA)

動詞 make と節目的語をとる複雑他動詞構文 1
形式：[make＋it＋目的語補語 C＋節目的語 O]

[1] 項構造構文と言い換えることができる.

意味：「O を C（であるよう）にする」

佐藤（2020, p. 145）の指摘に基づき，目的語の位置に it を置くことと，節目的語を外置することを別の現象と考え[2]，それぞれ形式的 it[3]，節目的語外置と呼ぶことにする．

しかし，例えば make X clear に代表されるように，動詞と目的語補語の組み合わせによっては形式的 it を伴わずに節目的語外置が起こる(3)．つまり，[make＋目的語補語＋節目的語] の形式になる．

> [N]ormally extrapositional *it* would be required; with *make clear*, the *it* is optional.
> (Huddleston & Pullum, 2002, pp. 289-290)

(3) (a) I made it clear, so far I don't see anything that proves he had anything to do with it. I also made it clear that I believe he does.

(b) Later, the part of the conversation that Berg omitted was revealed. And it makes clear that Sarah Obama misunderstood McRae at first, and tried repeatedly to correct McRae's misunderstanding, saying emphatically.

(Both from COCA)

動詞 make と節目的語をとる複雑他動詞構文 2
形式：[make＋目的語補語 C (clear)＋節目的語 O]
意味：「O を C（であるよう）にする」

したがって，複雑他動詞構文において，節目的語の場合では [make＋it＋目的語補語＋節目的語] の形式を典型的にとるが，一部の表現では形式的 it を必要としない [make＋目的語補語＋節目的語] という形式も見られるということになる．本稿では，形式的 it を伴わない節目的語外置を許す動詞と目的語補語の組み合わせの実態をコーパスで調査する．その前に，言語表現の頻度の位置付けについて述べておく．

3. 用法基盤モデルと言語表現の頻度

言語知識は実際の言語使用から形作られると考える立場が存在する．このような考え方は一般に言語の用法基盤モデルとして知られる（Langacker, 1987, 2000）．

用法基盤モデルでは，言語表現の頻度は言語知識の構築に重要な役割を果たしていると考える（Bybee, 1995, 2010; Dąbrowska, 2014; Goldberg, 2019; Schmid, 2010; 早瀬・堀田, 2005：第 4 章）．

---

[2] 佐藤（2020）は，節目的語外置を統語的な要因として，形式的 it は意味論・語用論的な要因として，それぞれを別の現象として区別している．

[3] 伝統的には虚辞の it，ダミーの it と呼ばれる．

[...]用法基盤モデルでは，頻度を結果的に見られる単なる兆候とはみなさず，むしろ頭の中での認知処理の方法に変化を与える原因，ひいては文法体系を作り上げていく主たる推進力になりうると考えている．

（早瀬・堀田, 2005, p. 78）

実際の言語経験から言語知識が形作られると考えるとき，経験する発話 1 つ 1 つが（丸ごと完全な形で，とまでは行かずとも何らかの形で，そして多くの場合，無意識で）記憶に蓄えられると考えなければいけない（Goldberg, 2019, p. 54; 平沢, 2016, pp. 45–46）．そして，触れる（トークン）頻度が高いほど，その表現の定着度は強化されていく．また，make X clear や make X plain, make X obvious など，その構造や意味に何らかの共通性・類似性を見出せる表現の数（タイプ頻度）が多いと，[make X CLEAR]「X を明らかにする」（CLEAR は clear, plain, obvious などの類義語群を意味する）や [make X 形容詞]「X を形容詞にする」といった，その共通性・類似性をもとにして抽象化されたスキーマの抽出を行うことになる．また，定着されていく表現の単位は，単語だけにとどまらず，イディオムやチャンク，定型表現に代表されるような 2 語以上で構成される句や，*I love you* などの節といった大きな単位でもありうる．用法基盤モデルの「言語知識は現実の言語経験から形作られる」という考えをより徹底する立場も存在する（Taylor, 2012; Yoshikawa, 2016; 黒田, 2007; 平沢, 2016）．

4. 方法論

複雑他動詞構文はタイプ頻度が高く，多くの動詞が複雑他動詞構文をとることが可能である．また，複雑他動詞構文において節目的語外置の際には形式的 it を典型的に伴い，例外として慣習的に it が随意的に現れると認められているのは make X clear である(4)．このことを踏まえ，今回のコーパス調査では動詞が make の複雑他動詞構文を調査する．

(4) [N]ormally extrapositional *it* would be required; with *make clear*, the *it* is optional.

(Huddleston & Pullum, 2002, pp. 289-290)

使用するコーパスは Corpus of Contemporary American English（COCA: Davies, 2008-）である．具体的な検索手順は以下の通り：

i. 節目的語外置が起こっている複雑他動詞構文の目的語補語のタイプとそれぞれのトークン頻度を調査する．[make it 形容詞 that] を検索する．補文標識 that は随意的な要素であるが，that が現れる事例に絞る．目的語補語は形容詞だけではなく名詞でもよいが，形容詞に限定する．動詞は活用形を認める（レンマ検索）．また，そもそも that が節を導く補文標識であることを保証される必要があるが，目的語位置に it が生起し，なおかつ目的語補語の直後に that が生起している環境では，that は外置された that 節の that であると推定できるため，that の直後の指定はここではしない．

ii. (i)より，節目的語外置が起こる複雑他動詞構文の動詞と目的語補語の組み合わせを踏まえ，それぞれの組み合わせにおける形式的 it を伴わない節目的語外置の頻度を調査する．(i)においてトークン頻度が上位であった形容詞を，[make 形容詞 that] に当てはめてそれぞれ検索する．

[動詞＋目的語補語＋that] の語順では，(5)のように目的語と目的語補語が倒置している事例，つまり補文標識ではない that が含まれてしまうことがある．また，動詞が made の場合，つまり [made 形容詞 that] では，受動態の形式が含まれてしまう．この受動態の形式では，(6)のように主語に it が生起する事例がほとんどで，この it が形式的 it と何らかの関係があることを否定できない．これらの問題に対しては，事例を 1 つ 1 つ確認し取り除いた．

(5) Our spontaneous faith in language as an enactment of our understanding makes possible that interminable, dizzying, even slightly mad homily [...]

(6) It must be made clear that personal religious objections do not exempt an individual from the mandate.

(Both from COCA)

また，このような手順をとる主な理由として，はじめから [make 形容詞 that] で検索すると make sure や make certain，そして make clear が上位を占めてしまい調査が効率的ではなくなるため，典型的には形式的 it が現れることを前提に目的語に節を取りやすい表現に絞ることで調査と比較を容易にするという意図がある．また，make sure や make certain は複雑他動詞構文とはみなさない．これらは make X sure，make X certain という形式ではなく，make sure of X，make certain of X という形式をとるため，複雑他動詞構文の形式に一致しない．

5. 結果

コーパス調査の結果を表 1 に示す．その前に 2 点，言及してかなければいけないことがある．1 つ目は make clear that ...の結果である（表 1 中の＊の箇所）．make clear that ...は他の「it なし」表現と比べ，圧倒的に頻度が高く，それゆえに前節で述べた補文標識ではない that や受動態の事例を手作業で事例を確認するのが難しいため，ここでは正確な件数を割り出さないことにする．注意されたいのは，頻度は圧倒的に多いということである[4]．2 つ目は make (it) certain that ...の結果の省略である．certain の事例は「it あり」が 15 件に対して「it なし」が手作業による確認なしで 1,054 件ヒットしたが，前節で述べたように make certain は make sure 同様に複雑他動詞構文の表現ではないとみなすため除外した．

[4] [make clear that]を検索すると 2,673 件が確認される．また，that を補文標識と確定させるために，that の直後に[1]主格の人称代名詞（I, you, he, she, it, we, they），[2]決定詞類（a, the, this, that, these, those），[3]所有格の人称代名詞（my, your, his, her, its, our, their）を指定し，さらに動詞は受動態の可能性がある made の例を除いた mak{e, es, ing}に限定すると，822 件が確認される．

表 1. COCA における [make (it) 形容詞 that ...] の形容詞ごとのトークン頻度の比較

形容詞	it あり	it なし
clear	4,921	*
unlikely	131	0
likely	127	0
plain	115	53
obvious	111	8
apparent	49	5
evident	38	11
inevitable	36	0
imperative	35	0
possible	31	4
mandatory	26	1
official	16	1
explicit	15	23
dear	15	3
essential	13	0
plausible	10	0

6. 考察

前節の表 1 に示した結果から，先行研究の記述の通り，複雑他動詞構文において節目的語外置の際に形式的 it が現れる形式が典型的であると言って良さそうである．形式的 it の有無の全体数を単純に比較するだけでも，「it なし」事例が圧倒的に少ない．特に，ダントツの件数を誇る make X clear を除いて最も節目的語が起こりやすい make X unlikely と make X likely が，今回の調査では「it なし」事例が 1 つも見られなかったことは，節目的語外置という現象において形式的 it を伴う形式が規範的でもあることを端的に表しているだろう．

しかし，これに反する例外が確認できることも確かである．特に，make X clear と意味が類似する表現—表 1 の中では make X {plain, obvious, apparent, evident, explicit}で，これらをまとめて「make X clear 類義表現群」と呼ぶことにする—は，その他の表現と比べて，明らかに形式的 it を伴わずに節目的語外置が起こりやすい．中でも make (it) plain that ...の頻度は，形式的 it の有無にかかわらず比較的高頻度であり，目を惹く．このことから，make X clear が make it clear that S と make clear that S のどちらの形式でも使用可能であることが慣習的に認められていることによって，make X clear 類義表現群においても形式的 it が現れない事例が現れやすくなっているのではないかという仮説が立てられる．言い換えれば，make X clear という表現が，make it clear that S と make clear that S の両方の形式で同様の意味で用いることができるという事実を前提にした類推によって，その類義表現も形式的 it を伴わない節目的語外置の形式をとりやすくなっている，というメカニズムだ．

より一般化した言い方をすれば，意味の類似性によって，言語表現 E_1 はその類義表現 E_2 の形式に影響を与えるということである．

これは，これまでの構文研究と親和性のある帰結である．意味の類似性によって，make X clear とその類義表現は 1 つのカテゴリー［ネットワーク，クラスター］を形成しうる．そのカテゴリーにおいて中心的な成員は make X clear だろう．もちろん，このカテゴリー自体がより一般的な動詞を make とする複雑他動詞構文のカテゴリーやより抽象度の高い（特定の動詞を想定しない）複雑他動詞構文一般のカテゴリーの下位カテゴリーである可能性が高い（少なくとも何らかの共通の特性を共有していると考えることができる）．

このカテゴリーに属さない複雑他動詞構文の表現は節目的語外置の際に形式的 it を伴うのが典型的であり，そしてこのような表現がほとんどである（規範的でもある）．したがって，あくまでも仮定の話だが，意味的な差異を生み出さない（と考えられる）形式的 it の有無の選択があるとしても，それまでの言語経験上「it なし」事例にほとんど触れることがなく，一方で「it あり」事例はタイプ頻度・トークン頻度ともに豊富であることから，「it なし」が好まれる可能性はかなり低いはずである．しかし，make X clear 類義表現は，その他の表現と同様に「it あり」事例が好まれることは確かだが，カテゴリー内で中心的な成員であり，圧倒的なトークン頻度を誇る make X clear が形式的 it を随意的にとることに影響を受けて，「it なし」事例が見られてしまうと考えられる．

しかし，make X clear 類義表現群の結果を詳細に確認していくと，考えなくてはならない問題が残っていることがわかる．結果からも，make X clear 類義表現群は形式的 it を伴わない節目的語外置を許しやすいことは明らかである．だが，make X clear 類義表現群の中でもその頻度には差（バラツキ）が見られる．表 2 は make X clear 類義表現群の結果である．

表 2. make X clear の類義表現

形容詞	it あり	it なし
plain	115	53
obvious	111	8
apparent	49	5
evident	38	11
explicit	15	23

複雑他動詞構文において節目的語外置の際に形式的 it を伴わなければいけないということを規範と考え，この規範を一種の「制約」のように捉えた場合，「it あり」事例が“通常”の頻度であり，「it なし」事例は“例外”ということになるため，例外の数は通常の数に比例すると考えたくなる．この場合，“例外”はただの誤りに過ぎない．英語，国語，数学，理科，社会の順で得意な A 君は教科ごとに 50 問ずつのテストを行い，英語，国語，数学，理科，社会の順で誤答の数が少なかった．わかりやすくするために，それぞれ 5，10，15，20，25 問の誤答があったとしよう．では，テストの問題数が 100 問に増えたと

したら，A 君の誤答の数は教科ごとにどうなるだろうか．経験的には，50 問のテストと変わらず英語，国語，数学，理科，社会の順で誤答の数が少なくなると考えるだろう．例えば，それぞれ 10，20，30，40，50 問の誤答をした，というように．実際，plain は make X clear 類義表現群の中で「it あり」「it なし」ともに最も頻度が高い．しかし，「it あり」では plain とほとんど同じ頻度である obvious が，「it なし」では一気に頻度が低くなってしまう．さらに，「it あり」では 3 番目に頻度が高い apparent は「it なし」で最も頻度が低くなるが，「it あり」では下位である evident や explicit が「it なし」で plain に次いで頻度が高い．特に，explicit は「it なし」事例の方が頻度が高いという点で特異である．このように，make X clear 類義表現というだけでは説明できないバラツキが観察される．

もう 1 点，注目したい結果がある．それは(un)likely と possible である．細かなニュアンスの違いはあるにせよ，誤解を恐れずに言えば，make X likely と make X possible のどちらも「X を可能にする，X はありうる」という意味を表す．つまり，make X {likely, possible} は類義表現とみなすことができる．

(7) (a) However, new technologies have made it likely that Europe will find energy resources that don't depend on Russia or third-party pipelines.

(b) Today, while the MB is a powerful political force, the weakness of the other forces makes it possible that with a free elections, Egypt will fall into yet another political monopoly of power, this time, under the MB.

(Both from COCA)

make X (un)likely の方が「it あり」事例の頻度は高く，全体の中でも make X clear 類義表現群を抜いて make X clear に次ぐ頻度になっている．しかし，表 3 に示すように，今回の調査では，(un)likely では「it なし」事例が 1 つも見られないのに対し，4 件と非常に少数ではあるものの possible ではその事例が発見された．その 4 件は(8)で示す．

表 3. make (it) {unlikely, likely, possible, plausible}

形容詞	it あり	it なし
unlikely	131	0
likely	127	0
possible	31	4
plausible	10	0

(8) (a) Because is you, who made possible That the people be government shall have

the historic responsibility of making real what Chile longs for... Candidate Salvador Allende and poet Pablo Neruda.[5]

(b) And certainly Chairman Rostenkowski, Pat Moynihan, all of us remember that in 1986 when we fashioned a great big tax measure, tax reform measure, we worked together on it, Republicans and Democrats, and what that does, it makes possible that you can have tough decisions.

(c) It is, of course, our duty to make possible that there is always a possibility for diplomacy to reach our common goal, and that is the disarmament of Iraq by peaceful means.

(d) you make possible that they live well! are entitled of adhering to unions! should demand, to form unions and to organize!

（All from COCA，全て原文ママ）

ここでも上述の make X clear 類義表現群と似たようなバラツキ現象が起こっている．make X clear 類義表現群の中で，obvious の事例は explicit よりも圧倒的に節目的語外置が起こりやすいが，「it なし」事例になると obvious の件数は激減し，逆に explicit の件数は obvious を上回る．今回の make X {unlikely, likely, possible, plausible}の比較において，(un)likely の「it あり」事例であれば make の複雑他動詞構文の表現の中でも上位だが「it なし」事例では事例が観察されないのに対して，「it あり」事例では頻度が中程度の possible は「it なし」事例が少数ながらヒットした．複雑他動詞構文における節目的語外置の際には形式的 it は現れなければいけないという制約からすれば，it が現れない場合は“例外”であるため，“通常”の場合に頻度が高い表現は“例外”の事例も多くなりやすいと経験的に考えてしまいそうだが，現実はそうはなっていない．

まとめると，make X clear 類義表現とその他の表現を比較し，類義表現は形式上の振る舞いも類似しやすいという帰結を得たが，それを前提として考察を進めると，その前提では説明できないバラツキ現象に突き当たることになった．

私は以上の問題に対して次の要因を提案する：構文 C_1 に当てはまる単語の並び P の頻度は，偶然にも同じ P の形式をとる別の構文 C_2 の頻度にも影響を与える．例えば，ある構文 C_1 は [X Y] という単語の並びを具体事例として含むとする．そして，別の構文 C_2 でも同じ [X Y] という単語の並びが見られるとき，C_1 の事例の頻度が高いと C_2 の事例の頻度も高くなるということである．複雑他動詞構文に適用すると，例えば make X explicit において，目的語と目的語補語が倒置した make explicit X の形(9a)が多ければ，倒置形ではないものの偶然にも見た目が一致する複雑他動詞構文における形式的 it を伴わない節目的語外置の形式(9b)，つまり make explicit that ...の頻度も高くなるということである．

[5] (8a)の“Because is you” “possible That the”はコーパスに掲載されている形そのままである．

(9) (a) I wanted Bride's mother to make explicit the advantages of being a light-skinned Negro.

(b) [T]hey forced the bill to make explicit that it could be repealed.

(Both from COCA)

この想定は用法基盤モデルに基づけば，自然な発想だと思われる．比較的シンプルな考え方で，[X Y] という単語の並びが多ければその分 [X Y] という形の定着度が強化され，より言いやすくなるからである．ただし，今回の make X clear 類似表現に限れば，意味の共通性が前提として存在することに注意したい．例えば，make X explicit の場合では，そもそも make X explicit「X を明らかにする」という構文があって，さらに倒置構文や節目的語外置構文という区別があるということを念頭に置かなければいけない．

表 4 に，COCA における倒置形 make {plain, obvious, apparent, evident, explicit} X の COCA での頻度を，複雑他動詞構文における形式的 it を伴わない節目的語外置の頻度と合わせて示す．このとき，[make 形容詞 X] の形式になっていることを保証するため，それぞれの形容詞の後に決定詞類（a, the, this, that, these, those）もしくは所有格の人称代名詞（my, your, his, her, its, our, their）が続くよう指定した．

表 4. make { plain, obvious, apparent, evident, explicit } X の頻度

形容詞	倒置形	it なし
explicit	164	23
plain	112	53
evident	37	11
obvious	26	8
apparent	21	5

このように整理すると，倒置形と「it なし」事例の頻度がある程度相関していることがわかる．make X plain は典型的な形式的 it を伴う節目的語外置の頻度が高く，なおかつ倒置形も高いため，形式的 it を伴わない節目的語外置の頻度も圧倒的に高い．そして，make X explicit の倒置形は，make X plain の倒置形を超えて，この中では最も頻度が高い．一方，総じて頻度が低い evident, obvious, apparent は「it なし」事例の頻度も比較的低くなっている．

続いて make X {possible, unlikely, likely, plausible}の倒置形の頻度を表 5 に示す．make X clear 類義表現の倒置形の検索の場合と同じく，それぞれの形容詞の後に決定詞類または所有格の人称代名詞を指定した．

表 5. make { possible, unlikely, likely, plausible } X の頻度

形容詞	倒置形	it なし
possible	773	4

plausible	10	0
unlikely	5	0
likely	3	0

make X {possible, unlikely, likely, plausible}の「it なし」事例は，make X clear 類義表現のおける make X clear のように「it なし」事例が慣習的に認められ頻度も高い表現がないため，事例が観察できる possible でも 4 件と非常に少ない．しかし「it あり」事例の頻度は (un)likely の方が高いのになぜ possible で「it なし」事例が観察されるのか，ということを考えてみると，本稿の主張は 1 つの説明になりうる．表 5 の結果から明らかなように，make X possible の倒置形は圧倒的な頻度を誇っている．つまり，[make possible] というチャンクの定着によって，「it なし」事例という規範から逸脱した形を生み出している．

そもそも make X explicit の全体の頻度が高いために make explicit that S という形も多く現れやすくなっていると考えればいいのではないか，という疑念を抱くかもしれない．確かに，make X explicit の全体の頻度が高ければ make explicit X の頻度も比例して高くなる可能性はある．しかし，make X explicit の全体の頻度に make explicit that S の頻度が比例していると考えると，典型的であるはずの make it explicit that S の頻度が低いことを説明できなくなってしまう．同様に，make X possible の全体の頻度が make X likely よりも高いから，make likely that S という形は 1 つも見られなかったのに make possible that S という形はいくつか観察されたと考えると，そもそも make it possible that S の頻度が make it likely に圧倒的に劣ってしまうことを説明できない．つまり，全体の頻度を“例外”の頻度と直接的に結びつけてしまうと，新たに問題が生まれてしまうのだ．ただし，例えば make X likely は X が節以外の場合では頻度は高いわけではないものの，X が節の場合に頻度が高くなることは問題である，と言っているわけではないことに注意されたい．make X likely は make it likely that S の形で使われやすい，というだけである．ここで議論しているのは，表現全体の頻度を今回の“例外”の頻度の要因として関係づけてよいかどうかであり，仮に関係づけてもよいと考えると，節目的語外置の際に形式的 it が現れる典型的な表現の頻度も全体の頻度を考慮して考える必要性が生じてしまう，ということだ．まとめると，表現全体の頻度とその表現の目的語と目的語補語が倒置した形（例えば，make X explicit と make explicit X）の頻度は関係があるかもしれないが，だからといって，表現全体の頻度と形式的 it を伴わない節目的語外置の形式（例えば，make X explicit と make explicit that S）の頻度を関係づけるのは，現段階では不適切であると判断する．

用法基盤モデルが想定する言語知識を構築するプロセスにおいて，ヒトは見聞きした複数の言語表現が共有しているパターンを抽出することでカテゴリーや抽象的なスキーマを形成していくと考えるが，そもそもそのパターンをどのようにして見抜いているのかという「始まりのパラドクス」という問題が指摘されている（Yoshikawa, 2009; 吉川, 2010）．つまり，用法基盤モデルでは「ヒトが類似性判断を行うことができる」ことを前提にしているものの，「パターンを抽出するには，そのパターンの存在を予め知っていなければいけない」という事態が発生する（吉川, 2010, p. 963）．この問題について，本稿の考察は「はじまりのパラドックス」を支持する 1 つの証拠となりうる．make explicit that S という形式が比較的認められやすいのは，make explicit X という形式の頻度が高く [make

explicit] という単純な語の並びがいわばチャンクのように定着しているためであると考えているが，この現象が起こるということは見聞きする発話に対して截然としたカテゴリー判断を行えているわけではないということになる．用法基盤モデルでは経験する発話によって言語知識の体系が作り上げられるのであり，「始まりのパラドックス」が指摘するように，はじめからカテゴリー判断が規範通りに行われるとは限らないからこそ，このような「混同」が起こり，そしてそれが言語規範を変容させていく 1 つもモチベーションなのではないかとも考えられる．

7. おわりに

動詞 make をとる複雑他動詞構文のコーパス調査と考察を通して，ある表現における具体的な単語の配列の存在によって，内在する文法構造が異なるものの同じ単語の配列になる表現の容認性を高めるという仮説を考察した．ただし，本稿の分析は非常に限定的なものであり，事例研究や仮説を提示する段階にとどまっている．複雑他動詞構文は動詞や形容詞の組み合わせのバリエーションや，節形式でも補文標識の違い（例えば，what 名詞節など）や定形か不定形かの区別があるなど，分析対象が広く存在する．以上が今後の課題となる．

参考文献

Bybee, J. (1995). Regular morphology and lexicon. *Language and Cognitive Process*, *10*(5), 425-55. https://doi.org/10.1080/01690969508407111

Bybee, J. (2010). *Language, usage and cognition*. Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/CBO9780511750526

Dąbrowska, E. (2014). Recycling utterances: A speaker's guide to sentence processing. *Cognitive Linguistics*, *25*(4), 617-653. https://doi.org/10.1515/cog-2014-0057

Davies, M. (2008-). *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 400+ million words, 1990-present.* Availble online at http://corpus.byu.edu/coca/

Goldberg, A. (1995). *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure.* The University of Chicago Press.

Goldberg, A. (2019). *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton University Press. https://doi.org/10.1515/9780691183954

早瀬尚子・堀田優子（2005）認知文法の新展開：カテゴリー化と用法基盤モデル．研究社.

平沢慎也（2019）前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ．くろしお出版.

Hirasawa, S., & Nishimura, Y. (2021). Native speakers are creative *and* conservative: What *Explain me this* reveals about the nature of linguistic knowledge. *English Linguistics*, *38*(1), 139-63.

Huddleston, R., & Pullum, G. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/9781316423530

黒田航（2007）徹底した用法基盤主義の下での文法の獲得：「極端に豊かな事例記憶」の仮説で描く新しい筋書き．月刊言語, 36(11)，24-34.

Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar Vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford University Press.

Langacker, R. W. (2000). A dynamic usage-based model. In M. Barlow & S. Kemmer (Eds.), *Usage-based models of language* (pp. 1-63). CSLI Publications. https://doi.org/10.1515/9783110800524.91

佐藤翔馬（2020）「虚辞」の it を含む構文の意味論的・語用論的研究．博士論文．名古屋大学.

Schmid, H. (2010). Does frequency in text instantiate entrenchment in the cognitive system? In D. Glynm & K. Fischer (Eds.), *Quantitative methods in cognitive semantics: Corpus-driven approaches* (pp. 101-33). Mouton de Gruyter. https://doi.org/10.1515/9783110226423.101

Taylor, J. (2012). *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford University Press. https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780199290802.001.0001

坪井栄治郎・早瀬尚子（2020）認知文法と構文文法．最新英語学・言語学シリーズ第 13 巻．開拓社.

Yoshikawa, M. (2009). The "beginning paradox": An empirical and conceptual problem in the current usage-based model of language. *Colloquia*, *30*, 55-72.

吉川正人（2010）「用法基盤」から「事例基盤」へ：妥当な言語記憶のモデルを求めて．言語処理学会第 16 回年次大会発表論文集，962-965.